

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI



「真夏の小さな、しかし大きな一歩」

2019 ARTA DIGITAL Rd.5 FUJI500
THE BIGGEST CHALLENGE OF SUMMER



夏の風物詩は鈴鹿から富士へ。
今年は真夏の超ロングレースが富士へと舞台を移し、
500マイル（800km）という長距離で争われることになった。
通常のレースよりも多くのポイントが与えられるため、
選手権を争うARTAにとっては重要な一戦になる。
GT500クラスを戦う8号車ARTA NSX-GTは40kg、
GT300クラスを戦う55号車ARTA NSX GT3は選手権をリードして
61kgものウェイトハンディを搭載しているため
決して楽な戦いにならないことは覚悟の上だったが、
タイトルを掴み獲るためには越えなければならないハードルだ。



AUTOMACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



真夏の暑さに加え5時間にも及ぶ長丁場は、ピットストップの回数も4～5回にのぼり、スタッフにとっても過酷な戦いとなる。

8号車は予選で15位に沈むなど、想像していた以上の苦戦を強いられた。

決勝が始まって苦境は変わらず、スタートドライバーの伊沢拓也はコース上でライバルと戦うのが難しいと無線で訴えた。

エンジニアの星学文としてもこればかりはどうすることもできないが、伊沢の精神力を途切れさせないように上手く盛り立てていく。



AUTOBACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



伊沢「駄目だ、全く追い付けない」

星「了解。あっちは柔らかめのタイヤだから後半キツイと思うよ。頑張っていこう」

星「37号車よりペース良さそうだからこれ頑張って抜いちゃおう」

伊沢「6速入ってからのストレートで離されちゃうんだよね……」

星「ここが頑張りどころだからなるべくペースを上げていこう」

33周目にピットインして野尻智紀に交代し、さらに積極的に追い上げていく。



ARTA
RACING
TEAM
ARTA

ARTA

走り始めのペースは悪くなかった。

星「トップとの差は少しずつ縮まってます」

しかしライバルたちも徐々にペースを上げてくると、

膠着状態に陥ってなかなか順位を上げる糸口が見つけられなくなってきた。

星「ちょっとハードタイヤがキツくなってきたかな？」

次のスティントはミディアムを考えてます」

野尻「このまま走っていてもちょっと打開策が見つからないから、

ミディアムに換えても良いかもしれない。

リアがブレーキロックするからブレーキバランスを前に持っていくと今度は前がロックする」



AUTOMACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA

星と野尻は早めのピットストップを話し合い、67周目に伊沢へと交代して第3スティントへと入っていった。

一方、55号車は福住仁嶺がスタートドライバーを務めて11番グリッドからスタートを切った。

土屋圭市エグゼクティブアドバイザーは、日本の混走レースで中国の混戦に不慣れな福住のためにアドバイスを送った。



AUTOBACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



AUTOMOBILES
RACING
TEAM
AGNELLI

ARTA



土屋「仁嶺、横はJP（オリベ이라）だからね。強気してくるからきをつける。

後ろは蒲生。こっちも絶対来るから、危なかったら行かしちゃいな。

その2台は行かしちゃいな」

福住「了解です。みんな危険ですね……」

土屋「ちゃんと組み立てていけよ。

ガソリンが軽くなるまではタイヤを労って、4号車に付いていって」

福住「頑張ります」

一瀬「了解、頼むよ！」

長丁場ゆえの堅実なレース運びを、というわけだ。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

8周目を迎える頃にはフロントタイヤのグリップ低下を訴えた福住だが、
それでもライバルに比べればペースは速く、
エンジニアの一瀬俊浩は福住に的確な情報を与えながらレースを組み立てていく。
福住「ちょっとフロントがツラくなってる」
土屋「仁嶺のペースは悪くないよ。前のヤツらは41秒台まで落ちてる」
一瀬「タイム的には40秒台で走れそうなら全然ありだと思う。
クリアラップで走れるなら第1スティントを伸ばしても良いと思う」



AUTOMOBILES
RACING
TEAM
AGARI

ARTA



土屋「仁嶺、カッコイイよ！ 仁嶺頑張れよ！ この周40秒台はお前だけだよ！」

周回数が25を超えピットストップのタイミングが近付いて来たところで、タイヤ交換をするかしないかを話し合う。

福住「無交換で行けるかもしれないけど、今頑張ってこのペースだけど、ガソリンが重くなったときにどうなるか分からない」

一瀬「どうしようか……ひとまずここは無交換でいって、駄目そうだったら次はハードにするよ」

しかしこの判断が裏目に出た。



AUTOMACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



BRIDGESTONE



ARTA



AUTOBA
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

AUTOBA
RACING
TEAM
AGURI

AR TA



FRANCE
2019
RD. 10
THURSDAY



ステアリングを引き継いだ高木真一はタイヤのグリップ低下に苦労させられペースを上げることができない。

高木「結構フロントが曲がらないなあ。頑張るよ……」

一瀬「お願いします」

高木「最終コーナーがちょっとキツイね。曲がらない」

一瀬「後ろは4号車です、2秒後方」

高木「これはキツイよ」

一瀬「了解、了解。ちょっと早めに入れます。ミニマムで入れます」

高木「相当ヤバいね、右回りが厳しい」

土屋「真一、頑張ってよ！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI
ARTA



結局、遅いペースで走り続けるよりとは、予定より早い51周目にピットに呼び寄せて
タイヤを換え福住にスイッチしてマシンを送り出した。

しかし1回目のピット作業時の給油中にマシンに触れてしまうミスがあり、
ドライブスルーペナルティを科されてしまった。

約45秒のタイムロスを背負うこととなり、順位を24番手まで大きく落として
コースに戻る事となってしまった。

一瀬「仁嶺ゴメン、ドライブスルーペナルティが出た。この周入ろう、その方がロスが少ない」

福住「どれくらいロスするの？」

一瀬「45秒」

福住「ホント、もったいない……」

土屋「仁嶺、集中して追い上げよう」



AUTOMACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



しかし直後に事故車両の回収のためセーフティカー導入となり、
早めにピットインしていたことが幸いしてピットインがまだだった上位勢とのギャップを
一気に縮めるという幸運に恵まれることとなった。

福住「今何位なの？」

一瀬「順位だけで言うと19位だけど、半周近く差があったのがトップの後ろでギャップがなくなって、
まだピットインしてないヤツらもいるからそことは40～50秒ギャップが縮まったことになる」



AUTOBACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



福住「じゃあまだチャンスはあるってことね。
でも前のGT-Rが鬱陶しいんだ、抜けないんだよなあ」
一瀬「結構順位は上げられそうだよ」

土屋「仁嶺の40秒台のペースだったらまだメチャクチャチャンスあるからね、頼むよ！」

8号車も同様にこのセーフティカー導入の恩恵を受けることになった。

しかしストレートで車速が伸びない症状は依然として出ており、

同じホンダのNSX勢と比べてもその差は明らかだった。

伊沢はコーナーで必死に稼ぐもののストレートで吐き出すということの繰り返しだった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



星「これで300がいなくなるからプッシュして。もうすぐ16号車がピットインすると思う」

伊沢「了解。早く入って。コーナーはuchiの方が速いんだけど、ストレートで置いてかれちゃうよ……」

それでも8位まで順位を挽回した伊沢は104周目にピットインして再び野尻に交代。

そしてその直後にまたしてもセーフティカーが入り、再び早めにピットストップを済ませていた恩恵を受けて

5位までポジションを上げることに成功した。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



野尻「（トップに浮上した）6号車はどこにいるの？」

星「4台ほど後ろにいます」

野尻「ていうことは僕を周回遅れにしようとしているということ？」

星「そうなります。他のクルマは見た目上は同一周回なんだけど、もう1回ピットに入らなきゃいけないから」

野尻「前の人たちがピットインして出てきたら、そこから同一周回の戦いが始まるということ？」

星「そう、他のクルマはアウトラップでタイヤが冷えているという状態ね」

だが野尻もペースを上げることができず、

後方から追い上げてくるマシンたちのタイヤが温まってくるとどうすることもできず2つ順位を落としてしまった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



MODII 1

B

POTENZA

COMTEC
Panasonic

SDD PREMIER

Coca-Cola

amsc
AUTOMOBILI MOTORSPORTS CONFEDERATION

CAR MATE PIAA
日東工業株式会社

B

B

BRIDGESTONE



AUTOMOBILES
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



141周目に伊沢に交代し、最終スティントは新品タイヤを履いて最後のプッシュをする。

星「残り37周です」

伊沢「これ新品タイヤだよね？」

星「そうです、ソフトの新品タイヤです。前の12はまだピットに入っていない、

2.5秒後ろの16は同一周回」

伊沢は7番手でコースに戻り、16号車とバトルを繰り広げていく。



AUTOMOTIVE
RACING
TEAM
ARTA

ARTA

伊沢「ゴメン、抜かれた！」

星「了解、了解。まだ長いから頑張ろう。今7番手。

後ろは17号車でかなり後ろだから気にせずに、16号車を抜くことだけを考えればいいよ。

頑張ろう」16号車を抜き返すことはできなかったが、終わってみれば7位。

予選で最下位に低迷したことを思えば、

決勝では二度にわたるセーフティカーの幸運もあって貴重な5ポイントを加算することに成功した。

絶望的な状況でも諦めなかったこと、そしてレース全体を見据えて組み立てたチームの総合力で掴み取った5ポイントだった。



AUTOMOBILE
RACING
TEAM
AGARTS

ARTA



AUTOMOBILES
RACING
TEAM
ARTA

ARTA



91周目に再び高木にスイッチした55号車は、
今度は左2輪交換でピットストップ時間をセーブして15番手でコースに戻り、
その直後に2度目のセーフティカーでこちらも再び恩恵を享受した。

一瀬「まだ上位はほとんど入ってない」

高木「じゃあラッキーなんじゃないの？」

一瀬「ラッキーだと思う」

高木「行っちゃうぜ、これ〜！」



AUTOMACS
RACING
TEAM
ARTA

ARTA

リスタート後はやはりタイヤのグリップ低下が進んで苦戦を強いられながらも、高木はオーバーテイクと他車のピットインで7位まで浮上して125周目に福住に最終スティントを託した。

福住「この前のGT-Rはなんなの？」

一瀬「同一周回だよ」

福住「ピットに入らない？」

一瀬「入らない」

福住「またGT-Rかよお……あぁ……」

一瀬「（オーバーテイクして）グッジョブ、

仁嶺の前は4号車で6秒」

福住「了解」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



一瀬「今ポジション10。残り26周。頼むよ！」

福住「頑張る」

一瀬「全車ピットインを終えてポジション9。」

ペースは全車の中で一番良いよ」

土屋「仁嶺、スゲェ良いペースだよ。

ベストラップ連発！頼むよ！」

14番手でコースに戻った福住は全体の中でも最速のペースで周回を重ね、
胸のすくような走りで次々と前走車をパスしていく。

最後に159周目の最終コーナーで接触もありペナルティを懸念したが、
レーシングアクシデントと判断され、福住は6位でチェッカーダフラッグを受けた。



ARTAS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

福住「ああ、ゴメン！ 当たった。結構かぶせてきた」

一瀬「チェッカーです、6位。アクシデントの判定が下ったから6位確定だよ」

福住「良かったぁ！ 皆さんありがとうございました」

土屋「みんなお疲れさん！ 仁嶺お疲れ！ 良い仕事したよ！」

一瀬「1回目のSCで上位にいたマシンが沈んだから、

チャンピオンシップ的にはラッキーだったね」

一時は絶望的な状況に追い込まれながらも、

貴重な6ポイントを獲得し、選手権首位の座をキープした。



ARTAGE
RACING
TEAM
ARTAGE

ARTA

苦境の中でも諦めず、最大限の結果を手にし続けること。

それこそが500マイルの戦い以上に長丁場である選手権争いを制するために必要な大きな鍵のひとつだ。

過酷な真夏の富士で、ARTAはその戦いをやり抜いた。

手にしたのは僅かなポイントでしかないが、悲願のタイトル獲得へ向けて極めて大きな成果を手にした今年の夏の決戦だった。



AUTOMACS
RACING
TEAM
AGARI

ARTA



株式会社オートバックスセブン

ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI ABURI STARTED IN 1999.
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO
BORDER
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD